

善光寺だより

日本パクナム会第八回総会開く

タイ国の上座部仏教寺院で得度修行した経験をもつ人たちが組織する日本パクナム会（石附周行会長）は第八回総会を十月二十六日午後四時から、東京・銀座の三笠会館で開催し、新会長に幹事長の黒田武志氏（横浜市港南区、曹洞宗善光寺住職）を選出した。

初めに黒田幹事長が経過報告を行なった。それによると、昨年三月の臨時総会で、タイのワット・パクナムに「日本文庫」を開設することを決め、六月の総会をワット・パクナムで開いて図書贈呈式、世界仏教徒連盟事務次長をつとめる小谷亀太郎氏の叙勲と在タイ五十周年の祝賀会、さらにカンチャナブリで戦没者慰霊法要

を執り行なうことを決議。しかしワット・パクナムの住職・副住職がアメリカ巡錫に出発するため急きょ予定を変更し、五月二十九日に東京・渋谷の東急インで、日本に立ち寄ったワット・パクナム住職に寄贈図書の目録を贈呈。次いで七月十八日、来日した小谷氏の祝賀会を銀座の三笠会館で開催し、石附会長から感謝状と記念品を贈呈した。

パクナムの「日本文庫」は、学者はじめ各方面の縁者からの寄付、仏書刊行の五社からの協力により図書四百五十冊を現地に送付。黒田幹事長は今年三月にワット・パクナムを訪れ、文庫の状況を確認したことを報告した。

また黒田幹事長は、藤井真水顧問（横浜市、高野山真言宗増徳院）が八月十一日に遷化したことに対し花輪を供えたこと、ワット・パクナムの副住職（パクナム会会員は親しみを込めて「アーチャン」と呼んでいる）が病に倒れたた

め先月見舞った様子では、だいぶ回復したが、今までのように世話をお願いすることは無理な状態であることなどを話した。

この後、役員改選が議題として上程され、冒頭、石附会長が辞意を表明、後任者として、同会創立以来の最高功労者である黒田幹事長を推したい旨を発言し、これに全員が賛成して満場一致で黒田氏の会長就任が決定した。石附前会長は顧問に就任し、幹事長には渡辺清孝氏が決まった。

会計報告の後、次回の総会をワット・パクナムで開催することに決定した。なお、現在バンコクでダイドーマン・グループ十八店舗を運営している会員の福田千城氏も来日して出席した。

同会事務局は、横浜市港北区大豆戸町二四二〇の日蓮宗本乗寺内、電話〇四五（四〇一）九九〇三。

現代建築にフィット 墨彩画個展が好評

墨彩画家として知られる伊藤三喜庵氏の個展「現代建築空間への墨彩画」が十一月八日から十六日まで、東京・銀座の和光ホールで開かれ、好評を博した。風景、人物、仏画の三つのテーマに絞った新作六十余点は、伊藤氏の画境が一段と広がり、深みを増したことを示した。

会場には、墨と顔彩、和紙と毛筆という日本的な画材を使いながら、欧米や東洋の風物、あるいは裸婦などバラエティーに富んだりモチーフの作品が並んだ。中でも釈迦の誕生から涅槃、仏像など仏教をテーマにした仏画が異彩を放った。同展二日目の九日夕刻から会場でレセプションが催され、建築家で画家という異色の経歴をもち、七十七歳の喜寿を迎えて衰えを知らない伊藤氏の若々しく意欲的な創作活動に対し、建築界や宗教界の友人・知人などから賛辞と激

励の言葉が贈られた。

冒頭、伊藤氏は「皆さんの激励により充実した人生が送れる。十六歳の時から油絵を描いたが、親父が絵描きではメシが食えないというので建築をやった。それも後継者に譲ったので、こうやって若い頃の夢を追っている。墨絵の二千年の伝統を抽象でなく写真で現代に生かし、現代建築にフィットするよう研究を重ねた作品だ。すべて実験と思っている」と挨拶。

美術評論家の水上杏平氏は「旺盛な創作意欲に感動した。視野の広い、モチーフの豊富な、しかも水墨を新しい角度から捉えた作品だ。昔から建築と絵画は切っても切れないもの。その第一人者が伊藤先生ではないか。絵描きに年齢はない。何歳までも素晴らしい作品を発表していただきたい」と讚えた。

また、千葉県柏市の曹洞宗龍光寺住職佐藤俊明氏は「仏教では、人はみな生まれながらにし

て仏心をもっているという。伊藤先生は素晴らしい絵心をもっておられる」と語り、伊藤氏が檀徒総代をつとめるなど格別縁の深い横浜市の曹洞宗善光寺住職黒田武志氏は「ますます世界的に活躍されていることを先生の自称応援団として喜ぶ」と祝意を表して乾杯の発声を行なった。

これらに対し伊藤氏は、最後に「倒れるまで美の創造を極め尽くして参りたい」と決意を披瀝し、来場の人々に謝辞を述べた。

米国人教師が剃髪・得度

横浜の山手学院高校で教鞭を執っているアメリカ人教師ペルキ・ローフ・エージン氏（日本名＝鈴木朗夫）が十日、横浜市港南区日野町の善光寺（黒田武志住職）で剃髪・得度し、黒田住職から「大玄」の僧名を授与された。ペルキさんはミネソタ州立大学の日本語学科を卒業



し、日本で市邨学園高校や愛知淑徳大学高校を経て現職にある。大の日本びいきで、日本の精神文化にも造詣が深く、仏教の素晴らしさに触れて、いつしか得度・出家を決意し、それ以来、得度の師を探し求めていた。縁あって黒田住職の存在を知り、いよいよ得度式を執り行なったもの。時期をまつて教職を退き、一人の修行僧

として雲水の身となり、金沢大乘寺の僧堂へ安居したい考えを示している。

得度式には、山手学院中学・高等学校の猪俣史郎校長、黒田住職との縁をつないだ茅ヶ崎市の玄珊寺住職福田素也氏、山手学院の留学生二十余人らが参列した。善光寺は日本から海外への留学僧や海外からの日本留学生を援助する育英事業を行ない、またタイ・上座部仏教の得度式を行なうなど国際的な交流活動を展開していることで知られる。それだけにペルキさんの得度式も分かりやすい言葉で行なわれた。「今ここに発願の善男子ペルキ大玄あり。大玄よ、心静かによく聴き奉るべし。この日すぐれたる因縁により、み仏の弟子となり、釈迦牟尼仏より代々伝えたまいしみ教えを学び、正しきみ仏の道を永く受け嗣ぐために得度の式を行なわんとす。」。こうして剃髪、坐具・衣鉢の授与、続いて菩薩戒法、血脈が授けられ、得度・授戒を円成

すると、参列した留学生たちはその意味を理解でき、仏教の素晴らしさを知ったと感動の声を上げた。

原田雪溪堂長インドへ

福井県小浜の発心寺専門僧堂・原田雪溪堂長は、インドのマハ・ボデー・ソサエティー（インド大菩提会）の招聘により、一月下旬から二月初めにかけてインドを訪問することになった。十一月二十三日、横浜市港南区日野町の善光寺（黒田武志住職）で開催された善光寺海外留学僧派遣育英会の第六回総会で発表されたもの。原田堂長の訪印については、ニューヨーク・ニュージャーザー港湾局アジア・太平洋地区支所の南西アジア貿易代表である坂井司氏が大菩提会から協力依頼を受け、実現のための具体的な手続き等について、善光寺の黒田住職に相談し、黒田住職が全面的な協力を約束したことに

より決定した。

大菩提会のサンガセーナ会長は、かねてから日本の禅に強い関心をもっており、また坂井氏の斡旋で原田堂長のインドにおける提唱の英訳本『平常心』をインドの仏教関係者に配布したところ、これが大きな反響を呼んだことなどから、原田堂長をぜひインドに招聘したいと坂井氏に協力を求めていた。坂井氏は親しい善光寺の黒田住職に相談し、黒田住職も実現のために協力を惜しまないことを約束した。現在までに決定したところによると、原田堂長は一月二十七日に成田を出発し、二月十二日に帰国する。インド滞在中、二月一日から八日まで、大菩提会での坐禅講習会に出席し指導する。公開講演会の開催も計画されている。インドでの日程に続いてマレーシアにも立ち寄り、仏教関係者と交流を図ることにもなるようである。